

紀伊湯淺附近産植物化石

“Tempskya” 屬に就きて

遠 藤 誠 道

材料は大正十四年五月上旬京都帝國大學理學部地質礦物學教室に於て、中村先生の御好意によつてその「アレパ
ート」及び顯微鏡寫眞と共に貸與せられ其後和歌山縣耐久中學校教諭城本藤太郎氏に御願ひして更に材料を送て頂
いて矢部先生の御指導のもとに、參考書も殆んど全部矢部先生の藏書を御借りしてしらべたもので、こゝに改めて
先生方皆々様に深く感謝いたします。

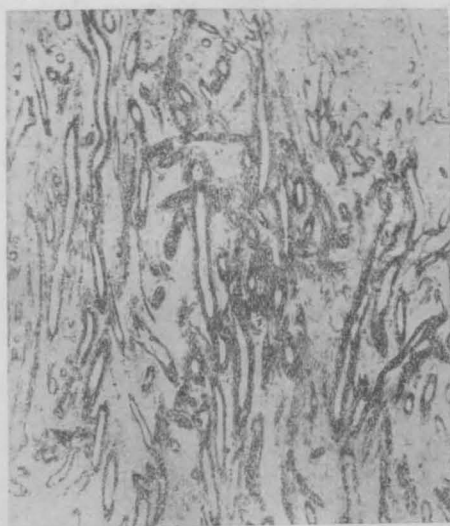
手許に集つた材料は悉く、枝分れした中空狀の直徑一ミリ米位の根が澤山略々縦の方向になら
んで束狀になつて居る(第一圖參照)(この束狀の根のかたまりの中に莖が圍まれて居るものと考へら
れるけれども我等の材料には莖と思はるゝ部分はあれど保存不良のためその構造が見ぬ)其横斷
面を顯微鏡下に檢するに二孔(Diach)で木質部(Xylem)は二個又は三個の大なる階紋假導管
(Scalariform Tracheides)が原始木質部の(Protoxylem)面に對し直角にならんで居る。木質部は
褐色の内鞘(Endodermis)の環によつて包まれて居る。内鞘と木質部との間にある柔膜細胞(Pa-
enchyma)はまれによく保存されて居る。

皮層(Cortex)は通常三層よりなる、最内部の層は膜が薄く、形大なる柔膜細胞で、次に中部の層
は非常に膜が厚く黒褐色にはつきりと目立つて見える硬膜細胞(Sclerenchyma)で、最も外部の層

は膜の薄い大なる細胞が二列又は三列にならんで居る、此部分は保存が大そうよい。(第二圖参照) これを在來のものにくらべて見るに *Tempskya Knowltoni Seward*¹⁾ 及び *T. rosica Kidston & Gwynne-Vaughan*²⁾ 等とよく一致するので、我等の標本は極めて不完全なものではあるが、現在のところ *Tempskya* 屬に同定してよからうと思はれる。莖の部分でも少し明瞭になれば種名までも決定することが困難でないけれども現在は致し方がない。

第一圖 (Ebina phot.)

Tempskya 屬の根の部分、縦斷 × 2.



Tempskya 屬は分類上未だ所屬不明であるけれど、恐らく木狀羊齒類に屬するものであるらう、我等の材料につきて檢鏡の結果、もし多くの材料を得ることが出来れば其所屬も明らかにすることが出来るやうに考へるので材料を更に集めた後に改めて述べるつもりである。

此古生植物學上興味ある *Tempskya* は層位學上にも重要なもので、産地の明瞭なる在來種は次に示す如く總て下部白堊紀より産出せるものである、「シユアード」教授の報告を引用すれば、

1. *Tempskya erosa* (Stokes and Webb, and Mantell).

これは英國「ウイールデン」層の特有なる化石で、又下部グリーンサンド (Lower Greensand)

(Aptian階) にも産出する。

2. *Tempskya Schimper* Corda.^{a)}

これはボヘミアのペルセル層 (Perucer formation) (下部白堊紀) 及び獨逸、佛蘭西のウイールデン層より産する。

第二圖 (Mr. Takahashi Phot.)

同根の横断面 × ca 40



3. *Tempskya Whitei* Berry.^{r)}

これは北米合衆國メーレーランド州のバタブスコ層 (Bataspco formation) (下部白堊紀) より産す。

4. *Tempskya rossica* Kidston and Gwynne-Vaughan.^{s)}

これは露西亞のムカデュール山 (Mougadjar Mountains) の第三紀の礫岩であるが恐らく白堊紀の地層より由來したものと考へら

れる。

5. *Tempskya Knowltoni* Seward.^{o)}

北米合衆國のモンタナ州の多分クローターニー層 (Kootanie formation) (下部白堊紀) より産出したものであらう。

さて我が Tempiskyra は紀州有田郡藤並村字水尻に産出するものにて水尻には長尾理學士による
と、『鳥屋城層と領石層とが存在すれども、産出地點不明なるため、その何れより産出せるかは明ら
かならず』との事なり。ベレンボフスキー (Velenovsky) 其他の人々により古く上部白堊紀 (Seno
nian 階) より産出せるの記載あれど¹⁰⁾は其後の研究により該産出せる地層が下部白堊紀の誤りなり
しものと考へらる。是を要するに¹¹⁾Tempiskyra 層は時代を指示する重要な植物化石なれども、我等
の材料はまた不完全なるを免れず、且つ産出地點も稍々不明瞭なるを以て、後日更に精査の上詳報
するところあるべし。

1) Seward, A. C.; On a new species of Tempiskyra from Montana: Tempiskyra Knowltoni, sp. nov.,

"Annals of Botany. Vol. XXXVIII, No. CLI, July, 1924, pp. 485—507. Pls. XVI, XVII, figs. 1—26."

2) a). Kidston and Gwynne-Vaughan; On a new species of Tempiskyra from Russia.

"Reprint from Verhandlungen der Russ. Kais. Mineralog. Gesellschaft, Band X LVIII, 1911, pp. 1—20.

Pls. I.—III."

b). Stopes, M. C.; Catalogue of the Mesozoic Plants in the British Museum. The Cretaceous Flora. Part II.

Lower Greensand (Aptian) Plants of Britain, 1915, pp. 9—21. Text-figs. 2—5.

3) a) Seward, A. C.; 1924, op. cit. pp. 499—503.

b) Stopes, M. C.; 1915, op. cit. p. 15. Text-fig. 5.

4) Seward, A. C.; 1924, op. cit. p. 504.

5) Stopes, M. C.; 1915, op. cit. pp. 16—21.

- 6) a) Schenk, A.; Beitrage zur Flora der Vorwelt; die fossile Flora der nordwestdeutschen Wealdenformation. "Palaeontographica, XIX, p. 259. Pl. XLII, Fig. 4. Pl. XLIII, 1871."
- b) Eittinghausen, C. von.; Beitrag zur näheren Kenntniss der Flora der Wealdenperiode., "Abhandlungen der K. K. Geologischen Reichsanstalt Bd. I, 1852. Abt. 3, 2, p. 19."
- 7) Berry, E. W.; Maryland Geological Survey, Lower cretaceous, 1911. p. 293, Pls. XXXVII, XXXVIII.
- 8) Kidston, and Gwynne-Vaughan; 1911, op. cit.
- 9) Seward, A. C.; 1924, op. cit.
- 10) Berry, E. W.; 1911, op. cit. p. 296.
- 11) Seward, A. C.; 1924, op. cit. p. 489.

生駒山脈生成論

槇 山 次 郎

近時斷層の地形研究が地理學家の流行の如くである。地形上判定せられる斷層は地質時代上極めて近代ものである事が必要である。地質學上の斷層が地形上容易に判定し得らるゝ場合はむしろ稀である。斷層によつて境する兩側の岩石の質が著しく差ある場合に於てのみ地質上の斷層が地形に露はれてくる。直線狀に見える谷をば直ちに斷層に關係すると見なす流義は誤謬に落ちやす